# 直列形二重倒立振子の安定化と運動表示について

On the Stability and the Display of Movement of a Series-type Double Inverted Pendulum

小田 秀男\* 波田 尚哉\*\* 藤井 昭広\*\*\* 内冨 昭三\*

Abstract: This paper describes the simulation method and the stability of movement of a series-type double inverted pendulum by pole assignment method.

For understanding the movement and the phase of two pendulums, it is useful for us to display the dynamic picture of them.

#### 1 まえがき

倒立振子装置は、近年、色々の形式の物が開発製作 されている<sup>1)</sup>。棒を1本ないし2本連結して立て、下端 を水平方向に駆動し、鉛直に一直線になるような装置 であるが、それは、現代制御理論の有効性を検証すた めの実験的な好例として、認識されているためである。

筆者らも、学生実験あるいは実習用として装置の試 作を進めているが、その試作運転にあたっては、シミ ュレーションの結果を積極的に利用する事が不可欠と 考えられる。このための、CADソフトとして、 M ATLAB<sup>2</sup> を用いている。

しかし、このソフトはどちらかと云えば平面的な表 現方法が強く、学生実験などの見地からすれば、若干 直感的な表現不足が感じられる。

そこで、パソコンにより倒立振子の運動をシミュレ ーションし、その動作を観測出来るよう動画表示ソフ トを開発し、数値計算結果のアニメイション表示を試 みた。

その結果、一本のみについては、既に良好な結果を 得たので<sup>3)</sup>、今回は二本直列形について報告する。

- \* 宇部工業高等専門学校電気工学科
- \*\* 豊橋技術科学大学工学部
- \*\*\* 九州工業大学工学部電気工学科

#### 2 数式モデル \*

図1は直列形二重倒立振子のモデル図であり、この 系についてラグランジュの運動方程式を求める。台車、 第一振子、第二振子についての運動エネルギー、位置 エネルギー、損失エネルギーをそれぞれ

To,Uo,Do,Ti,Ui,Di,T2,U2,D2 とすると (1) 台車について



図 1 直列形二重倒立振子のモデル図

(2) 第一振子について  

$$T_{1} = \frac{1}{2}J_{1}\dot{\theta}_{1}^{2} + \frac{1}{2}m_{1}\left\{\frac{d}{dt}\left(r\cos\alpha + l_{1}\sin\theta_{1}\right)\right\}^{2}$$

$$+ \frac{1}{2}m_{1}\left\{\frac{d}{dt}\left(r\sin\alpha + l_{1}\cos\theta_{1}\right)\right\}^{2}$$

$$U_{1} = m_{1g} (r \sin \alpha + l_{1} \cos \theta_{1})$$
(2.2)  

$$D_{1} = \frac{1}{2} c_{1} \dot{\theta}_{1}^{2}$$
(3) 第二振子について  

$$T_{2} = \frac{1}{2} J_{2} \dot{\theta}_{2}^{2}$$

$$+ \frac{1}{2} m_{2} \left\{ \frac{d}{dt} (r \cos \alpha + L \sin \theta_{1} + l_{2} \sin \theta_{2}) \right\}^{2}$$

$$+ \frac{1}{2} m_{2} \left\{ \frac{d}{dt} (r \sin \alpha + L \cos \theta_{1} + l_{2} \cos \theta_{2}) \right\}^{2}$$

$$U_{2} = m_{2g} (r \sin \alpha + L \cos \theta_{1} + l_{2} \cos \theta_{2})$$

$$D_{2} = \frac{1}{c_{2}} (\dot{\theta}_{2} - \dot{\theta}_{1})^{2}$$

$$D_2 = \frac{1}{2} c_2 (\dot{\theta}_2 - \dot{\theta}_1)^2$$

の式が成り立つ。

(2.3)

(2.5)

(4) 二重倒立振子系の運動エネルギーT、位置エ ネルギーU、損失エネルギーDはそれぞれ

$$T = T_0 + T_1 + T_2$$

$$U = U_0 + U_1 + U_2$$

$$D = D_0 + D_1 + D_2$$
(2.4)

となり、台車には、カロが働いていることから、ラグラ ンジュの運動方程式

$$\frac{d}{dt}\left(\frac{\partial T}{\partial \dot{r}}\right) - \frac{\partial T}{\partial r} + \frac{\partial U}{\partial r} + \frac{\partial D}{\partial \dot{r}} = u$$
$$\frac{d}{dt}\left(\frac{\partial T}{\partial \dot{\theta}_1}\right) - \frac{\partial T}{\partial \theta_1} + \frac{\partial U}{\partial \theta_2} + \frac{\partial D}{\partial \dot{\theta}_1} = 0$$
$$\frac{d}{dt}\left(\frac{\partial T}{\partial \dot{\theta}_2}\right) - \frac{\partial T}{\partial \theta_2} + \frac{\partial U}{\partial \theta_2} + \frac{\partial D}{\partial \dot{\theta}_2} = 0$$

が成り立つ。 (2.1)、(2.2)、(2.3) 式を(2.4) 式の各式に代入すと、

$$T = \frac{1}{2} \left[ (m_1 + m_2 + M) \dot{r}^2 + (J_1 + m_3 J_1^2 + m_2 L^2) \dot{\theta}_1^2 + (J_2 + m_2 J_2^2) \dot{\theta}_2^2 + 2 \left\{ (m_3 J_1 + m_2 L) \cos(\theta_1 + \alpha) \dot{r} \dot{\theta}_1 + 2m_2 J_2 - \cos(\theta_2 + \alpha) \dot{r} \dot{\theta}_2 + 2m_2 J_2 L \cos(\theta_1 - \theta_2) \dot{\theta}_1 \dot{\theta}_2 \right]$$

$$(2.6)$$

 $U = (m1 + m2 + M)g\sin\alpha \cdot r + (mu_1 + m_2L)g\cos\theta_1 + m_2l_2g\cos\theta_2$ (2.7)

$$D = \frac{1}{2}F\dot{r}^{2} + \frac{1}{2}(c_{1} + c_{2})\dot{\theta}_{1}^{2} - c_{2}\dot{\theta}_{1}\dot{\theta}_{2} + \frac{1}{2}c_{2}\dot{\theta}_{2}$$
(2.8)
よつて (2.5) に代入し、行列を用いて表すと、

$$\boldsymbol{K}_{0}\begin{bmatrix} \ddot{\boldsymbol{r}}\\ \ddot{\boldsymbol{\theta}}_{1}\\ \ddot{\boldsymbol{\theta}}_{s} \end{bmatrix} = \boldsymbol{K}_{1}\begin{bmatrix} \dot{\boldsymbol{r}}\\ \dot{\boldsymbol{\theta}}_{1}\\ \dot{\boldsymbol{\theta}}_{s} \end{bmatrix} + \boldsymbol{K}_{s} + \boldsymbol{K}_{s}\boldsymbol{u} + \boldsymbol{K}_{s}$$
(2.9)

ただしKo,K: は3行の行列 Ks,Ks,Ks は3行の列ベクトルで



のように与えられる。 今、状態変数を

Res. Rep. of Ube National Coll. of Tech. No. 44 March 1998

(2.11)

と定義すると、(2.9)式から二重倒立振子系の非線型 状態方程式は、

$$\dot{S} = \begin{bmatrix} \dot{S}_{\theta} \\ K_{\theta}^{-1} (K_{1} \dot{S}_{\theta} + K_{\theta} + K_{\theta} u + K_{\theta}) \end{bmatrix}$$
(2.12)

となる。

ところで、二重倒立振子系については、その制御目的 から倒立状態近傍での挙動を表す状態方程式を知れば十 分である。そこで、(2.12)式で、静止状態を表す *s*=0 において1次近似すると、二重倒立振子系の状態方程式 として、次の線形化した状態方程式を得る。

$$\begin{bmatrix} \dot{r} \\ \dot{\theta}_{1} \\ \dot{\theta}_{2} \\ \dot{r} \\ \ddot{\theta}_{1} \\ \ddot{\theta}_{2} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & E'_{2} & \\ & & \\ A'_{22} & A'_{22} & \\ & & \\$$

よって、

 $\dot{s} = As + Bu + w' \tag{2.14}$ 

ただし

$$A' = \begin{bmatrix} 0 & E'_{s} \\ A'_{ss} & A'_{ss} \end{bmatrix}$$

$$B' = \begin{bmatrix} 0 \\ B'_{s} \end{bmatrix}$$

$$w' = \begin{bmatrix} 0 \\ w'_{s} \end{bmatrix}$$

$$A'_{ss} = L_{1}^{-1} \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & (m_{s}l_{1} + m_{s}L)g & 0 \\ 0 & 0 & m_{s}l_{s}g \end{bmatrix}$$

$$A'_{ss} = L_{1}^{-1} \begin{bmatrix} -F & 0 & 0 \\ 0 & -c_{1} - c_{s} & c_{s} \\ 0 & c_{s} & -c_{s} \end{bmatrix}$$

$$B'_{s} = L_{1}^{-1} K_{s}$$

$$w'_{s} = L_{1}$$

そして、さらに新しい状態 xを



と選び

座標変換すると、次のような数式モデルを得る。

$$\begin{bmatrix} \dot{r} \\ \dot{\theta}_{i} \\ \dot{\theta}_{s} - \dot{\theta}_{i} \\ \ddot{r} \\ \ddot{\theta}_{i} \\ \ddot{\theta}_{s} - \ddot{\theta}_{i} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & E_{s} \\ A_{ss} & A_{ss} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} r \\ \theta_{i} \\ \theta_{s} - \theta_{i} \\ \dot{\theta}_{i} \\ \dot{\theta}_{s} - \dot{\theta}_{i} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ B_{s} \end{bmatrix} u + \begin{bmatrix} 0 \\ w_{s} \end{bmatrix} u + \begin{bmatrix} 0 \\ w_{$$

(2.13)

(2.19)

よって、

*x* = *Ax* + *Bu* + *w* ただし

$$A = \begin{bmatrix} 0 & Es \\ A_{21} & A_{22} \end{bmatrix}$$
$$B = \begin{bmatrix} 0 \\ B_{2} \end{bmatrix}$$
$$W = \begin{bmatrix} 0 \\ W_{2} \end{bmatrix}$$
$$A_{21} = NA'_{21}N^{-1}$$
$$A_{22} = NA'_{22}N^{-1}$$
$$B_{2} = NB'_{2}$$
$$W_{2} = NW'_{2} \qquad (2.20)$$

一方、出力として r,  $\theta_1$ ,  $\theta_2 - \theta_1$  とすると、 出力方程式は

 $y = C x \tag{2.21}$ 

ただし

$$C = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$
(2.22)

以上、(2.19) 式 (2.21) 式から、直列形二重倒立振子の 数式モデルが得られた。

3 シミュレーションの方法

二重倒立振子系の運動方程式から得られた式から、 その時間的な応答を知るには状態方程式を時間につい て解けばよい。

ここで、一階の微分方程式

$$\frac{d x_{1}}{d t} = f_{1}(x_{1}, x_{2}, \cdots, x_{n}, t)$$

$$\frac{d x_{2}}{d t} = f_{2}(x_{1}, x_{2}, \cdots, x_{n}, t)$$

$$\vdots$$

$$\frac{d x_{n}}{d t} = f_{n}(x_{1}, x_{2}, \cdots, x_{n}, t)$$
(3.1)

を初期条件

$$t = t_{0} \quad 0 \geq \geq x_{i} = a_{i} \quad (i = 1, 2, \dots, n)$$
  
のもとで解く。いま  

$$F_{i}(x_{1}, \dots, x_{n}, t) = \int f_{i}(x_{1}, \dots, x_{n}, t) dt$$
  
(3.2)  
とすると  

$$x_{i}(t) = F_{i}(x_{1}, \dots, x_{n}, t) + c_{i}$$
  

$$x_{i}(t_{0}) = F_{i}(a_{1}, \dots, a_{n}, t_{0}) + c_{i} = a_{i} \quad \downarrow D$$
  

$$c_{i} = a_{i} - F_{i}(a_{1}, \dots, a_{n}, t_{0})$$
  

$$\therefore x_{i}(t) = F_{i}(x_{1}, \dots, x_{n}, t) - F_{i}(a_{1}, \dots, a_{n}, t_{0}) + a_{i}$$
  

$$= \int_{i_{0}}^{i} f_{i}(x_{1}, \dots, x_{n}, t) dt + a_{i}$$
  
(3.3)

t = tk のとき  
xi(tk) = 
$$\int_{io}^{a} f_i(x_1, \dots, x_n, t) dt + a_i$$
 (3.4)  
 $t = t_{k+1}$  のとき

$$\begin{aligned} x_{i}(t_{k+1}) &= \int_{t_{0}}^{h+i} f_{i}(x_{1}, \cdots, x_{n}, t) dt + a_{i} \\ &= \int_{u}^{h+i} f_{i}(x_{2}, \cdots, x_{n}, t) dt + \int_{t_{0}}^{h} f_{i}(x_{2}, \cdots, x_{n}, t) dt + a_{i} \\ &= x_{i}(t_{k}) + \int_{u}^{h+i} f_{i}(x_{2}, \cdots, x_{n}, t) dt \end{aligned}$$

$$(3.5)$$

よって、(3.5)式の第二項を数値計算により近似計算す れば、微分方程式を解くことができる。

\*本研究では、4次のルンゲクッタ法 <sup>3)</sup> を用いて計 算を行った。(3.6)式にその式を示す。

$$\int_{a}^{u+1} f_{i}(x_{1}, \cdots, x_{n}, t) dt = \frac{1}{6} (u_{1i} + 2 \times u_{2i} + 2 \times u_{3i} + u_{4i})$$
(3.6)

ただし

Res. Rep. of Ube National Coll. of Tech. No. 44 March 1998

(3.7)

4 シミュレーションのアルゴリズム

プログラムは図2のような手順で作成した。

- (1)二重倒立振子系の各定数を設定。(振子の質量、長さ等)
- (2)状態方程式の行列 A, B, w の計算。
  (2.19)式において、(2.15)、(2.17)、(2.20)から 求める。
- (3) 極配置法によるフイードパック係数の算出。
- (4) ルンゲクッタ法により状態方程式を解く。
   (3.5)、(3.6)、(3.7)式から時間応答を求める。
- (5) (4)より数値解を表示。
- (6) (4) より数値をグラフ表示。
- (7) (4)より動画表示。





図2 全体の流れ図

27



#### 図3 状態方程式の計算



図4極配置法によるフィードパック係数の計算





図5 ルンゲクッタ法によるパラメータの計算





図7アニメーションの表示

5 シミュレーションの実行

5-1 プログラムの実行方法

作成したプログラムは、直列形二重倒立振子系に対 して状態フィードバック制御したときの時間応答をシ ミュレーションするものである。この系の振子、質量 などの各定数はプログラムの中で設定しているので、 極および初期値を入力すればよい。そうすると、シミ ュレーション結果の表示は、数値表示、グラフの表示、 そして、動画表示の3つから、選んでそれぞれを表示 することが出来る。以下にその表示を示す。

1) 系の設定した各定数が画面に表示される。

二重倒立振子のシミュレーション		
第1振子の質量	0. 103 kg	
第2振子の質	0. 070 kg	
第1振子の重心までの距離	0. 350 m	
第2振子の重心までの距離	0. 177 m	
第1振子の慣性モーメント	0. 003000 kg·m <sup>2</sup> 2	
第2振子の慣性モーメント	0. 001527 kg·m <sup>2</sup> 2	
第1振子の摩擦	0. 001920 kg·m <sup>°</sup> 2/s	
第2振子の摩擦係	0. 000893 kg·m <sup>2</sup> /s	
台車の質量	0.574 kg	
台車の摩擦係数	2.810 kg·m <sup>2</sup> /s	
第1振子の長さ	0. 379 m	
第2振子の長さ	0. 300 m	
レールの傾き	0. 000 rad	

2) 極を入力する。ただし、極は共役複素 と する。

```
極の配置を決めて下さい

\lambda 1=a+jb, \lambda 2=a-jb を入力して下さい

a=-5

b=2

\lambda 3=c+jd, \lambda 4=c-jd を入力して下さい

c=-4

d=3

\lambda 5=e+jf, \lambda 6=e-jf を入力して下さ

e=-3

f=0
```

3) 台車の位置及び振子の角度の初期値を入力す る。

初期値を入力してください	
台車の位置は?	
r =0. 5	
第1振子の角度01は?	
θ 1=0. 1	
第2振子の角度θ2は?	
<u>θ</u> 2=0	

4) 方程式 x = Ax + Bu + w のA, B, W の計算結果を表示する。更にリターンキーーを押す と極配置法によって計算されたフィードバック係数 が示される。(各数値は省略)

5)シミュレーションの表示方法を選択する

時間応答の数値表示	1	
時間応答のグラフ表示	2	
アニメーション	3	
設定を変える	4	
終了する	5	
どのシミュレーションにしますか ?		

#### 5-2 極の配置と時間応答

二重倒立振子系の各定数および初期条件は以下のように設定した。

二重倒立振子系の各定数	
第1振子の質量	0.103 kg
第2振子の質量	0. 070 kg
第1振子の重心までの	距離 0.225
第2振子の重心までの	距離 0.177 m
第1振子の慣性モーメ	ント 0.001738 kgm <sup>3</sup>
第2振子の慣性モーメ	ント 0.000731kgm <sup>2</sup>
第1振子の摩擦係数	0.001920 kgm²/s
第2振子の摩擦係数	0. 000893 kgm <sup>2</sup> /s
台車の質量	0. 574 kg
台車の摩擦係数	2. 810 kgm²/s
第1振子の長さ	0. 450 m
第2振子の長さ	0. 354 m
レールの傾き	0. 000 rad
初期鳣	
台車の位置	<i>r</i> = 0.5 m
第1振子の角度	$\theta_1 = 0.0$ rad
第2振子の	$\theta_s = 0.1$ rad

5-3 シミュレーション結果

極をa), b)のように設定したときのシミュレー ションの結果を示す。

a) 虚軸から離れている場合

$$\lambda_1$$
,  $\lambda_2 = -5 \pm j 5$ ,  $\lambda_3$ ,  $\lambda_4 = -5 \pm j 0$ 

 $\lambda_5, \lambda_6 = -4 \pm j 0$ 

b) 虚軸に近い場合

$$\lambda_1$$
,  $\lambda_2 = -1 \pm j 5$ ,  $\lambda_3$ ,  $\lambda_4 = -5 \pm j 0$ 

 $\lambda_5$ ,  $\lambda_6 = -4 \pm j 0$ 

### a) 虚軸から離れている場合



Res. Rep. of Ube National Coll. of Tech. No. 44 March 1998



5-3 極の配置と動画表示 a) 虚軸から離れている場合

## b)虚軸に近い場合



#### 6 あとがき

現代制御理論は大規模複合システムで多入力多出 力制御系に適用するとき有効である。近似・線形化 が必要であるため、実系への適応が困難なことが多 いので、シミュレーションで検討することが有効に なる。単なる数値計算でなく、実系に即した実験装 置としての倒立振子を設計するにあたり、各部品の 仕様を決定できる。また、極配置の設定から系の安 定性を動画として観察し、応答波形をも観測できた ので、初期の目的を達成した。

今後は、外乱を考慮した場合の挙動や対策につい て検討したい。さらに並列形二重倒立振子のシミュ レーションについても検討を進める予定である。

#### 参考文献

- 第31回 学術講演会 デモセッション資料集
   1992.7、計測自動制御学会
- 2) サイバネットシステムkk MATLAB ユーザ ーズガイド
- 3) 波田、小田、内富: 倒立振子のシミュレーションとディスプレイに関する研究 1996.年 宇部高専電気工学科卒業論文集
- 4) 梶原:制御系CAD コロナ社 (1988)
- 5) 平田: Turbo Cによる科学計算入門 共立出版

(平成9年9月24日受理)